21世紀における体育の方向に関する一考察

片　岡　暁　夫

A Study of the Direction of Physical Education in 21st Century

KATAOKA Akio

序論

1．研究の目的

現在，10年ぶりの学習指導要領の改訂が行われつつある。21世紀最初の指導要領となるものである。このような時点において，教育政策，なかでもとくに体育政策について原理的かつ哲学的に検討することに一定の意義があると考える。そこで，本論では，そのような立場から視点を立てて，今回の指導要領改訂の起点になった第15期中央教育審議会第一次答申を中心に21世紀における体育の方向について若干の考察を行うことを目的とする。本論文は総説的な論文である。

2．分析の対象；中央教育審議会第一次答申の根底にある状況および思想について検討し教育と体育について敷衍する。

3．分析の枠組みの検討

教育政策の構成を概念的には，①時代の課題，②教育政策の策定，③学習指導要領を中心とする教育実践，の３階層に区分できる。そしてこれらに対して④メタレヴェルの原理的な諸問題に関する政治哲学的考察，が関係する。本小論の考察の手順はまず，１．メタレヴェルの原理的な諸問題に関する政治哲学的考察をおこない，しかる後に分析対象として，①時代の課題，②教育政策の策定，の２点について分析し，紙数の関係から，③学習指導要領を中心とする教育実践の分析については論じない。

本論

1．分析の視点；メタレヴェルの原理的な諸問題に関する政治哲学的考察

（1）21世紀における地球規模の課題

人類の21世紀の課題は，20世紀に出来した地球規模の諸問題をどのように解決して行くのかというところにあることは，衆目の一致するところであろう。例えば19世紀までに地球上の人口は150万年かかって10億人に達したといわれる。現在，10億人の増加に必要な 年数は，約15年である。したがって，20世紀において，人口は10万倍の速度で膨張しつつある。毎年，フランスの人口に匹敵する約6000万人強が地球上に増加しつつあることになり，これらの食料，エネルギー，その他を，米国人や日本人の生活水準で供給するとすれば，膨大な負荷が地球にかかってくるのである。炭酸ガスの排出に象徴される人類の生活は2050年には大気の温暖化により，南米のアマゾンを森林地帯から，草原ないし砂漠に変えてしまうだろうという予測もなされている。地球に酸素を供給し，炭酸ガスを吸着する膨大な森林が破壊されるとすれば，生物・生態系に及ぼす悪影響は計り知れない。

（2）思想的課題

このような問題の原因となったのは19世紀西欧における科学と技術の結合であるといわれる。なぜこのような結合が西欧において成立したか，中国や日本ではなぜ成立しなかったのか，という問題については，人種の知能や素質によってではなく，歴史的状況とその根底にある思想に原因があると云われている。とくにヘブライ的・砂漠生活的な場を生きていくために形成されてきた人間観に大きくかつ根底的に影響されているといわれ

る。

その内容は，一つは神と人間の距離が近く，自然との距離が遠いということ，これはすなわち，人間と人間以外のものとのつながりがなく，人間は他の者を利用するが，生態学的な関連から独立で生きられるという思想となった。

第二に，神の前では人は平等であるという信念がある。18世紀において西欧では，フランス革命やアメリカ革命といった人間平等思想を実現するための事件が生じ，ギリシア以来分離していた学問と技術という社会階級別に分担されていたものが，混交する現象が起きて，科学・技術の結合が生じたのだという説明がある。啓蒙の思想は，科学技術の発展は人類に幸福をもたらすと信じられてきたが，今，疑われている。上記の生態学的な関連から，人種差別や性差別の問題は人間の平等に基礎をおくが，現在では，人間と他の動物との扱いの差別を「種差別」として批判する見解が出てきている。平等の枠が人類からはみ出したところまで拡大せざるを得ない状況にある。「個人の自由」や「個人主義」もまた，一種の幻想ではなかったか。すべての存在が結びつき，生存のネットワークを結んでいるとすれば，おのずから自由が制限され，個人も全体とのバランスが要求されるであろう。人と人はつながり，環境ともつながっているという認識が必要とされている。

そして，このようにして，第三に，西欧中心の「ヒューマニズム」は破綻した思想となった。ヒューマニズムの思想史的性格である時代社会批判とギリシア的人間への回帰という観点から離れて，現代は，「異文化理解，多文化主義，マイノリティ論，ポストコロニアリズム，差別論」などが機能することにより，地球規模の人間の協力態勢を実現する道をさぐらなければならないのではないだろうか。いわば西欧的人間中心主義から多元主義へと転換しつつあるのである。人文主義的なギリシア的人間への回帰では問題は解決する見込みがない。多元性を認めながら，協力することが要請されているのではないか。そして何よりも，現在，存在せず，何らの権利をも主張できない子孫の人々を射程に取り入れる世代間倫理の思想へと転換しなければならないのであるが，「ヒューマニズム」は現存する人間の相互性についての思想であった。存在せず，目に見えない人間関係の連帯の視点が重要になる。

第四に「進歩」の思想が衰退するであろう。進歩はよいものであるという信念が存在する。「進歩」は幻想であると見る立場も出てきている。進歩の思想史を概観してみよう。

「進歩は一般に，ものごとや人間の能力が望ましい方向へ発展すること」であるが，哲学では「歴史，社会，人類などの巨視的レベルで論ぜられる」概念である。

「古代ギリシアの哲学・思想にあって，歴史，社会，人類が進歩するという考えはほとんどみられ」ず，例えば，プラトンでは「堕落や循環として語られることが多かった」。「パウロやアウグスティヌスに代表されるキリスト教の終末思想は，歴史が神の恵みの下で完成へむかうという歴史観を唱えたが，その場合でも，歴史を人間の力で進歩させるという考えは傲慢なものとして退けられていた」。

「近代に入ると，歴史や社会を人間の力で望ましい方向へおし進めようという思想が，次第に優勢」になる。「そうした近代の思想は，まず，自然を技術の力によって意のままに支配し，地上に人類の王国をつくろうとした17世紀のF．ベーコンに始まる。」「このベーコンの思想は，18世紀のフランス啓蒙思潮で熱烈に歓迎され」，「人間の精神が無限に進歩に向かうという前提の下，科学，技術，社会，倫理が人類史においてパラレルに進歩していくことを唱えた」コンドルセがでる。19世紀に入り，「封建制から産業文明への進歩を情熱的に説いたサン＝シモンを経て」「知(学問)の発展段階論」を唱えたコント，「単純なものから複雑なものへの進化を，宇宙における進歩の一般法則」とみなしたスペンサー，「人間の自由な意識が社会の中へ浸透していくプロセス」を進歩とみなしたヘーゲル，「各自の自由な発展が万人の自由な条件となるような社会の実現へ向けての歴史の歩みが，進歩を意味した」マルクスなどが出た。

「こうした進歩の思想は，19世紀後半以降ニーチェなどによって痛烈に批判」され，「20世紀に入って，科学技術や生産力の発展が必ずしも社会や道徳の進歩に結びつかず，大きな戦争や地球環境破壊を引きおこすことが明らかになるにつれ，ますます懐疑の対象となってきた。」「進歩への懐疑を唱える思想家」にはポストモダニスト，エコロジー倫理学の提唱者がおり，他方「どこまでも

近代の人権や民主主義の実現を達成さるべき進歩とみなすハーバーマスのような思想家もおり，進歩は現代思想における一つの興味深い争点を成している」(岩波，哲学・思想事典)といわれている。

自動車の発明や核兵器の開発などは進歩などではなく，人類の破滅につながるものの典型ではなかったかと疑われているのである。少なくとも，後の世代を考慮に入れてはいない科学技術の産物である。

同じことが学校制度についても云えるだろう。人間の進歩が生じるはずであった近代の学校制度において，上達や熟練は生ずるが，人類や社会の進歩は保証できなかったのではなかろうか。進歩は幻想であったといえよう。人間はそれほど進歩できなかったのではなかろうか。

第五に，地球は無限であって，人間の無限な消費をささえてくれるという信念にも連なっている。空気や水は無料で無限であり，石油は無限で汲みつくせないものだというように考える習慣ができあがった。またより速い自動車や飛行機さらにはコンピュータ，より大きな船や建物，より強い軍事力，より多量のエネルギー消費などが求められるのが当然と考えられてきた。それらが科学技術の発展の前提に潜在しているのである。

第六に，「ユートピア」の思想も破綻を示している。マルクス主義は未来に完成した共産主義社会をユートピアとして描き出したが，現実には成功しなかった。むしろ，数々の不幸を生んだ。ナチスドイツもドイツ国民にある種のユートピアの幻想を抱かせたに違いない。戦時中の日本もまた神国日本や大東亜共栄圏などのユートピア幻想を利用した。つい先だってのバブルに湧いた日本では，レジャー時代の到来を歌い上げ，リゾートに過大な投資を注入し，土地の騰貴を当て込んだが，それが銀行の破綻にむすびついている。ユートピアには夢があるが，それは，近付くと危険であるのに近付きたくなる人間の心理を利用している落とし穴にすぎないのではないだろうか。それは現実から目を逸らす作用がある。

以上は問題となる思想のいくつかの例にすぎない。我々の行動を導き，目的や目標を設定せしめる重要な思想が転換をせまられているのが２１世紀の時代なのである。要するに，生態学や環境倫理学が指摘する状況が，現代社会の批判力となっているのである。すなわち「その主たる原理は，①自然の生存権(人間だけでなく，生物の種，生態系，景観などにも生存の権利があるので，人間は勝手にそれを否定してはならない)，②世代間倫理(現代の世代は，未来の世代の生存可能性にたいして責任がある。または，地球の資源利用に関して各世代が平等の権利をもつ)，③有限主義(資源をフローとして扱うべきではなく，資本として減少分を補填しなくてはならない)」と要約される。(岩波，哲学・思想事典，1998)

以上を整理すると，地球規模の問題が生じていることに基礎をおき，その反省として，①神と人間の距離が近く，自然との距離が遠いという信念，②神の前では人は平等であるという信念およびそれに関連する信念，③「ヒューマニズム」の信念，④「進歩」の信念，⑤地球は無限であって，人間の無限な消費をささえてくれるという信念，⑥「ユートピア」の信念の破綻となる。これらは，①自然の生存権，②世代間倫理，③有限主義を基にして展開された思想的側面からの批判である。

地球環境の問題は地球規模の政治によって解決されなくてはならないのであり，したがって，思想的側面において政治哲学の問題として検討されなくてはならないのである。上記の表１は，そのような視点のごく大まかな概観であるが，我が国の教育・体育政策を検討する本小論の視点とする。

表１　分析の視点

現　実　相	環境倫理相	検討を迫られる思想
地球環境の諸問題	自然の生存権	神・自然・人間の距離感の変更
		自由・平等論の再検討
	世代間倫理	ヒューマニズムの見直し
		進歩に対する懐疑
	有限主義	無限の虚構性
		ユートピアの虚偽性

2．我が国の教育・体育政策の吟味

（1）教育政策の捉える時代の課題の分析－第15期中央教育審議会第一次答申における時代相の変化の把握

この答申は「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」と題されて平成8年8月に公表されている。この中で把握された問題点は以下のようなものである。

a．慌ただしさ；「経済の成長，交通・情報通信システムの急速な整備など，様々な分野における進展は我が国社会を著しく変貌させた。確かに人々の生活水準は向上し，生活は便利になったが，その反面，人々の生活は［ゆとり］を失い，慌ただしいものになってきたことも否めない。家庭もその有様を変貌させ，地域社会も地縁的な結びつきや連帯意識を弱めてしまった。」(p.12)。こどももまた慌ただしい生活を送っていると認識されている。

b．仮想現実性；「疑似体験や間接体験が多くなる一方で，生活体験・自然体験が著しく不足し，家事の時間も極端に少ない」(p.13)

c．社会性の不足；「子供たちの人間関係を作る力が弱いなど社会性の不足が危惧される。」(p.13)

d．不道徳さ；「中学生の規範意識に関して・・・低下していることが示されており，子供たちの倫理観についての問題もうかがえる。」(同)

e．自立の遅れ；「日常生活や自分の将来について調べた調査では，子供の自立が遅くなっている傾向が見られる。」(p.14)

f．不健康で低い体力；「肥満傾向を有する者の増加や視力の低下など新たな健康問題が生じており，適切な生活行動についての知識や，それを実践する力が子供たちに不足しているという指摘もある。・・・瞬発力，筋力，持久力，柔軟性などは全般に低下傾向にある。これらは，日常生活において，体を使っての遊びなど基本的な運動の機会が著しく減少していることに起因すると考えられる。」(p.14)

g．暗い学校生活；「中学校，高等学校と進むにつれて学校生活への満足度が減少してくるという傾向がうかがえる。」(p.15)「いじめや登校拒否の問題も極めて憂慮すべき状況にあると言わなければならない。・・・特にいじめについては，これを苦にしたと考えられる自殺事件が相次いで発生しており，憂慮に堪えない。」(同)

h．家庭の教育力の低下；「父親の・・・家庭での存在感の希薄化，・・・家庭教育に対する親の自覚の不足，親の過保護や放任などから，その教育力は低下する傾向にあると考えられる。」

i．地域社会の教育力の低下；「都市化の進行，過疎化の進行や地域社会の連帯感の希薄化などから，地縁的な地域社会の教育力は低下する傾向にあると考えられる。」(p.16)

以上のような問題の原因について「戦後の経済成長の過程で，社会やライフ・スタイルの変容とともに生じてきたものと言わなければならない」のであり，また「都市化や情報化の進展によって，・・・地域社会の地縁的な結びつきが弛緩していったこと・・・」に原因があるのである。そして「家庭や地域社会の教育力の低下の問題は，日本人のライフ・スタイルや現代社会の構造そのものにかかわる問題であり，その新たな構築を図ることは容易ではないであろう。」(p.17)と見ている。

以上こどもの置かれている状況をまとめると次の表2のようになる。

これらが原因となって出てきた結果を例示したものが次の表3である。こどもが放り出されているありさまが想像されよう。

表2　日本の子供の問題状況－原因

発現相＼問題領域	家庭的問題	学校的問題	地域的問題
心身相	不健康で低い体力	慌ただしさ	仮想現実性
社会相	自立の遅れ	社会性の不足	不道徳性
生活相	家庭の教育力の低下	暗い学校生活	地域社会の教育力の低下

表3　日本の子供の問題状況－結果

発現相＼結果領域	家庭的結果例	学校的結果例	地域的結果例
心身相	不活発な遊び	興味の喪失	現実感覚の喪失
社会相	無責任	孤独化	罪悪感の喪失
生活相	家庭での放任	学校での閉塞	地域での放任

この表3と分析枠組みを対比してみよう。まず「地球環境の諸問題」に対応できるような子供が育っているかについては，一目瞭然，不可能であるといえよう。「自然の生存権」を認識できるような人間を越えた広い連帯感覚を身につける見込みも皆無であろう。人間同志の結びつきが希薄であり，自由・平等という再検討を迫られる問題以前の状況であることがわかる。また，世代間倫理が育成されるような見込みもなく，進歩に対する懐疑感なども出てこないであろう。自分だけよければいいという人間に育つのではないかと思われる。したがって，有限主義で，我慢のできる人間ではなくなるであろう。無限の虚構性やユートピアの虚偽性に簡単にだまされることになるのではないだろうか。

（2）教育政策の策定の分析

表3を，必要性に応じて改めると，表4のようになる。

表4と表1を対比すると，心身相における現実感覚の獲得が重要であると指摘できる。それは，もちろん「健康で高い体力，活発な遊び，ゆとり，興味の発見」を土台とするものではあるが，結局，地球環境の諸問題についての，自然の生存権・世代間倫理・有限主義ということの現実感覚の基礎となるものだからである。社会相についてはいずれも重要であるといえよう。人類が生き残る鍵を握る部分だからである。そして，生活相では学校が起動力となることも期待されるが，むしろ，政治の方向選択が重要になってくるであろう。家庭政策や地域政策が大きく関与しなければならないであろう。環境問題はとくに地域の生活に深く関係するものであり，また，地球環境の問題の出発点ともなるものだから重視されなければならないのである。

表4　日本の子供の問題状況－解決の方向

発現相＼結果領域	家庭的結果例	学校的結果例	地域的結果例
心身相	健康で高い体力 活発な遊び	ゆとり 興味の発見	現実性の回復 現実感覚の獲得
社会相	自立の促進 責任	社会性の獲得 連帯化	道徳性の涵養 罪悪感の学習
生活相	家庭の教育力の回復 家庭でのしつけ	明るい学校生活 学校での解放	地域社会の教育力の回復 地域での連帯

このようなことについて，中教審ではどのように論じられているだろうか。「これからの社会の展望」の中では，日本の諸課題が述べられている。科学技術を創造し，新しいフロンティアを開拓していくこと，より付加価値の高い製品やサービスを提供する高次な経済社会へと経済構造の改革をしていくこと，新しい雇用システムに切り替えること，国際的摩擦や競争に堪えること，高度情報通信社会の実現，「地球環境問題，エネルギー問題など人類の生存基盤を脅かす問題も生じてきている。これらは，大量生産・大量消費・大量廃棄型の現代文明の在り方そのものが問われる問題であるが，今後，地球規模でこれらの問題に取り組んでいく必要性はさらに高まり，この面で，我が国の貢献がさらに強く求められるようになっていくことが予測されるところである。」という。この内容は，ふたつに分けられる。すなわち「我が国の生き残り」と「地球規模の問題への取り組み」である。この二つを共に実現することは，かなりの難問であるが，避けて通れない課題であるといえよう。これは言い換えれば，生産と環境の矛盾の止揚の課題である。

例えば，現代文明の在り方，すなわち大量生産・大量消費・大量廃棄型の現代文明が人口爆発のしからしめるところであるということを示唆している。100人の人が200人に増えたら，生産・消費・廃棄物が2分の1にならねばならぬところを，現在生きている人々の都合により，1とすることで無責任が子孫に対して生ずるという問題が出現しているのである。人口が10倍になれば生産・消費・廃棄物が10分の1にならなければ生きていくことができないという論理である。そこで，だれが，どの国が10分の1を分担するかの競争が始まっているのである。ある国は人口のほとんどが餓死し，他の国は競争に勝つことによって，ほとんどが生き残るということが目に見えているということである。資源のない日本は科学技術の先端を行くことによって10分の9の餓死から逃れようとするのであるのではないだろうか。苛酷な現実を突き付けられているのである。しかし，大量廃棄問題の解決は困難な課題である。例えば生活廃棄物や原子力発電の廃棄物の処理には難しい問題が出てくるであろう。国境内で，リサイクルが完成することが求められる時代となっている。

表4の現実感覚の獲得と関係して，避けられない問題は，情報化社会が到来しつつあるということである。この情報は仮想的な現実を構成する。いわゆるヴァーチャル・リアリティである。そこに生じる人間の精神や魂の疎外が問題となる。つまり，精神や魂を使う現実が消えてしまい，こどもたちは仮想現実においてしか成長の契機をえられないという事態となる。人と機械の関係は，人と人との関係とは異なるから，問題のある精神状況を生み出しつつある。いわば人間の絆が切れつつある原因の一つである。しかしながら情報化社会の到来を避けて通れないのである。どうしたらよいのであろうか。情報と現実の関連を重視する内容を確保しなければならないであろう。

表4の社会相についても，困難な問題が控えている。学校教育の崩壊が進行しているのである。制服を着て公衆の面前で地面にあぐらをかいて煙草を吸う女子高生なども日常的に目にするようになった。ついこのあいだまでしゃがんでいたのだが，いまは地面に座り込む。多くの異常な行動が出現しつつある。経済の繁栄が社会相の喪失の代価を支払って得られたものなのだろうか。わが国は高度経済成長を遂げた。しかし，成長は限界に達している。安定成長が唱えられたが，少子・高齢社会においては，マイナス成長が避けられないのではないか。「進歩」の思想と関係の深い「成長」の思想も問題のある思想ではないだろうか。

体育・保健体育については「不易」なものとしての健康と体力の必要を充足すべきものとして位置づけられているが，とくに保健に対しては，「流行」の現象，すなわち，薬物濫用，援助交際など現代的な現象に対処すべき教科とされている。

「ゆとり」と「生きる力」の育成という教育政策策定の鍵概念は人類の抱えた巨大な問題の前で，具体的な効果をどこまで出せるか，上記の内容からかなりの困難が予想されるといえよう。

3．21世紀の思想

以上に述べてきた課題から推論すると，21世紀の思想が見えてくる。まず，地球環境の観点から「全体の都合によって個人の選択の自由が制限される」という傾向が強まるであろう。例えば，嫌煙権の立場から喫煙の場所が制限されてきた事例に似ている。すでに炭酸ガスの排出規制は国際関係の問題となっている。石油や石炭を使う生産者・消費者は，喫煙者に，そして地球はどこにも煙の排出口がないが一定の浄化能力がある室内と類比できる。人類は自由の発揮について，有限な地球環境という視点から，「無限」ではなく「有限」を思想の装置として受け入れなければならないであろう。有限の中でいかに充実するかの智恵が必要となる。この有限性は持続的な環境の維持を前提としている。消費し尽くしてしまうのではなく，いつまでも人類および生物が生存し続けられる環境を意味している。すでに生態系のバランスが崩れはじめており，幾多の種が絶滅の危機にあることは周知のとおりである。

平等の権利が人類だけでなく，多様な生命的存在にまで拡大されることになろう。人類の権利や自由が制限されなければならない。どのような方法論においてそれが実現するかは現在のところ不明であるが，政治的な課題となるであろう。

さらに，存在しない者にも権利が認められ，我々現在生存する者は，未来に生まれてくる子孫に対して生存を保証する責任があるということになるであろう。そのためには環境危機の回避が進歩やユートピアに代わって未来イメージとなるであろう。環境崩壊の恐怖の予測と事態の回避へ向う政治が重要になる(ハンス・ヨーナス)。成長や進歩の夢に賭けるにはあまりに危険な時代に我々は生きている。夢の代わりに，恐怖の予想に基づいて，それを避ける自重的な政治が行われなければならない。プラス思考がもてはやされているが，慎重な舵取りのためには，マイナス思考も重要になる。

失われた種は回復できない。例え，遺伝子操作で，死体から生体を生み出すことができたとしても，あるいは他の種に遺伝子操作を加えて，失われた種を再生しえたとしても，それが生きていける環境がなければ回復不可能である。そのような意味で，存在すること自体に価値があるということになる。すべての生物は自己が存在することに価値の原点を置く。そこにおいて，存在と価値は結合している。それが生態系の調和という結果をもたらす。生態系は価値の総合システムであるといえよう。以上のような見解をまとめると表5になるであろう。

表5　分析の視点－その2

現　実　相	環境倫理相	出現しつつある思想
地球環境の諸問題	自然の生存権	自然と人間の距離感の接近
		全体による自由・平等の制限
	世代間倫理	形而上学的な責任論理
		循環と反復の意義の重視
	有限主義	有限な現実主義
		恐怖の予見と早期対策

このような問題について，例えばスポーツ哲学の領域を一瞥してみよう。1996年のJPS(Journal of the Philosophy of Sport)において，動物スポーツの倫理学の特集が組まれている。ローリンはエスニックなスポーツであるロデオについて擁護する見解を述べている。またウェイドはスポーツと種差別について論じている。さらに，キールはエコ・フェミニストの立場から狩猟スポーツとそれにまつわる男性中心主義思想を批判している。さらにローランドは，エコソフィで有名なノルウェーの哲学者アーネ・ネース(Arne Naess)の理論を概観し，スポーツに対して適切な枠組みを与えるならば，スポーツはとくに生態学的価値があるものとなろうと主張している。要するに，環境倫理の問題はすでにスポーツ論の世界にも影響を与えつつあるといってよいであろう。

4．21世紀日本の教育・体育の課題に関する若干の考察

日本の教育にとってまず，リアリティの回復が課題である。これは，身体の復権を必然とするであろう。例えば，自分の実情を感じられること，他人の痛みを想像できること，他の生物の痛みを感じられること，これから生まれてくる子孫の苦しみを直感できることといったように統合的に直感にリアリティを回復するという課題である。いわば，身体で自分および他の存在を知りつながりを回復することが重要となる。生きている森と死んだ都会の空気の違いを直感できること，あるいは，他の生命と人間のつながりを直感できること，それらの原点に身体で知るということ，身体によるリアリティの確保が位置づくのである。現代生活では専ら「見る」，「聴く」といった映像や言語に関する知覚が情報処理の重要な機能を果してきた。しかし，それらの多くの時間はヴァーチャル・リアリティ化され，道具化・手段化され，感情や直感の能力との結びつきを喪失し，身体から離れていく傾向になってしまっている。身体疎外，つまり，生命の中心部と遊離し，感覚・知覚の機能が断片化する傾向を強めているのである。このような傾向は，嗅ぐ，味わう，などの食生活の感覚にも異常をもたらしているのではなかろうか。つまりヴァーチャルな食習慣が出来上がっている。それは不必要なカロリーの摂取に結びつく食欲調節機能失調から生活習慣病の原因となるという展開でもある。感覚の統合にはリアリティが必要なのではなかろうか。とくに，深部の感覚，例えば内蔵感覚や皮膚感覚や筋の深部感覚がリアリティの判断の基礎となる。最近「むかつく」や「きれる」という言葉をよく聞くのであるが，それは，例えば，内蔵感覚など生命の基本感覚に危機がせまっている兆候であると理解できるのではなかろうか。人間の深層における反乱が始まっている。身体で他者を知ることができなくなっているのである。人間は人の間と表現し，社会的存在であると定義されるのであるが，それも怪しくなっている。

以上のことから，目に見えないものを直感できるリアルな想像力の回復が重要になってくる。たとえば，他人の痛みは目にみえない。動作としてあらわれたものの背後に痛みや苦しみが存在しているからである。表面の動作観察は，内部と連動しているのだと確信してはじめて意味をもつのであるが，テレビやビデオの演技を見慣れた目には内部と連動していないと解釈することがむしろ原則である。涙を流しても悲しいとは限らないし，いじめても，相手が苦しんでいるとはかぎらないと思うようになるのである。リアリティの喪失は自分自身についての判断でも生ずるにちがいない。自分の痛み・苦しみを把握するのが遅く鈍くなるであろう。慢性の疲労感や不定愁訴，あるいは無力感が襲っているのに気が付かない。臨界状態にあるゆえに，簡単に「きれる」のである。

現代人にとって，人間の運動や動作から内部を直感することはますます難しくなっている。内部まで想像しながら運動や動作を模倣することが基本課題である。内部と運動との確信に満ちた連動を作り出す方法は，日本の伝統文化であるさまざ

まな道や術における「型」の教育法に原型がみられる。それは単に形態学的に分析されれば終わりというようなものではない。心術との連動が求められるのであり，師範の人格まで取り込む模倣なのであったろう。みえないもの，見えにくいものを統合的に掴み取ることの修練である。そのことによって，認識の形態が変化する。「分析と総合」という現代科学の方法は，意味を捨象し，物量に還元する。たとえばわれわれが見ている色彩は，光線の波長や振動数に還元される。そのような認識方法を学校で教わり，習慣となっている。しかし，生きているものにとって重要なのは，むしろ色彩であろう。それによって生活上の様々な判断を行うからである。そのような意味で，色彩は確実に存在するのである。それは純粋化されたものというよりもむしろ，混じり合っているものであり，分析されない全体といってよいであろう。運動や動作もまた色彩のような存在性格をもち独自の認識方法を要請するものでなければならない。そうでなければ，生活のための判断ができないからである。現実の運動や動作の場の中に生きることによってはじめて認識できるような，認識方法である。全身で認識するのであり，情動や深部感覚や深層意識にまで響くものとして認識するのである。これが身体で認識するということであり，リアリティの根源として身体を位置付けるということであろう。意味も捨象されていないのである。

このような意味で，アリストテレスの言うような実践の賢慮ということが体育を初めとする教育の重要な目的となってくる。パフォーマンスを上げることではなく，パフォーマンスを行うことが重要なのである。教室で温和しくして観念を獲得するのではなく，フィールドに出て実践の賢慮を得ることが重要なのである。

例えば，オリンピックのモットーである「より速く，より高く，より強く」は一面の強調にすぎず，不完全である。「よりゆっくりと，より低く，より弱く，あるいはより敏感に」で補われなければならないのではないだろうか。パフォーマンス向上主義は筋力の最大収縮や最大緊張の瞬間を美しいものとして歌い上げる。人生でみれば20代を中心とした思想であり，一種のユートピア思想であり，進歩主義の思想である。生涯スポーツにおいて，高齢になるほど「よりゆっくりと，より低く，より弱く，より繊細に」が必要であり，そこにも熟達の美が見いだせるであろう。中国的に云えば，陰と陽の両面を見なければバランスがとれないということである。ここから，循環の重要性が指摘できる。生涯スポーツとは，実質的には週何回かスポーツを続けていくということであるとすれば，それは循環の維持という課題である。パフォーマンスの向上を求めるのではなく，生活の中の循環要素として組み込むことを求めるのである。たとえば，記録を求めるのではなく，勝敗を競う楽しみを続けるということである。適当な相手に恵まれて，勝敗の時間を循環していくことである。技の上達や心境の深まりは，偶然に訪れる副次的なものであり，それを第一次の評価基準としてはならないということである。循環し反復することに意義があり評価の第一次観点となるのである。あせらず淡々と循環することによって熟達が自ずとおとずれるといってよいであろう。

さらに「よりゆっくりと，より低く，より弱く」はリラックスと関係する。成長や進歩，あるいは競争から急き立てられ慌ただしい生活を送り，やがて遠からずバーンアウトするのではなくて，そこから解放される時間も生活循環に取り入れるということである。「ゆとり」ある生活の基礎部分をなす。緩急を織り交ぜることが循環的生活の要諦であるといっても過言ではなかろう。とくに循環と反復から生来するスポーツの熟達において，そのような相面が出現することは，よく知られたことである。そして賢慮もまた「ゆとり」から生じる生活の熟練ないし智恵に基づいているといえよう。

21世紀には数々の難問が控えている。それを乗り越える人類の智恵や創造性が求められている。そのためにも，意識の奥深く入り込み，真実を語る身体に耳を傾ける習慣を持つことが効果的であろう。テオリア(観照 theoria)はそのようなことを意味している。これを視覚中心として捉えず，身体感覚全体において捉えなおすならば，「実用目的でもなく単なる娯楽でもない，純粋に事柄をそれ自体として眺め，真相を究明しようとする知的態度を意味する」(哲学・思想事典；岩波)ところに視覚をも包み込んで身体全体が連動を始めるであろう。このことが身体的に思考するということである。このように20世紀と21世紀とでは価値

観の転換が生じるのではないかと考えられるのである。そして我々は，その兆しをすでに見ることができのである。生活循環を共にする仲間をもつこと，それは同調し共鳴しておおきなうねりをなすであろう。地域の教育力にもつながるのである。さらに政治力にも連なり，子々孫々にいたる循環をも，自分自身の問題として把握する思想となるのではなかろうか。

スポーツ・フォア・オールというモットーも，毎年地球上に出現する6000万人分の場所とエネルギーを供給しつづけることは不可能なのである。場所を取らずエネルギーも消費しないスポーツ活動もたくさんある。それらを取り混ぜながら自分のスポーツ生活を構成する智恵が要求される時代となるだろう。そのような意味でスポーツ・フォア・オールが理解されるならば，スポーツが現実性を回復するであろう。

また，個体内の「上達や熟練や成長」と，「歴史・社会・人類の進歩」とを，はっきりと区別すべきである。前者は事実であり，後者は幻想ではないかと疑われている。上達や熟練は，生きていることの副産物である。進歩主義の教育思想や体育思想は50年ほど前には栄えていた。「進歩」は場や環境に対応する必然的な変化である「適応」とは異なる。人類的な記録の樹立，すなわち種目の進歩，に向う成長も限界にきているのではないか。これから100年，100米の記録が順調に短縮をつづけ，７秒台で走れるようになるとは考 えられない。100年で，毎年平均100分の１秒短縮をつづけると８秒８程度になるであろうが，それはほぼ不可能である。人類の走能力が「無限」に「進歩」すると考えるのは誤りであろう。重量挙げなどの記録も「無限」ではない。競泳も同様である。体操競技などの難易度も人類限界に近付いてきているのではないか。難しいことを行えば得点が高くなるという思想も反省する時期にきている。いずれにしても，「無限」の方向に向う思想は人間にふさわしくないであろう。このように考えると21世紀のスポーツを支える思想は変化するに違いない。そして，以上のようなスポーツ思想の変化にも呼応して体育の主要思想も変化していくであろう。

参考・引用文献

1）アリストテレス(1967)：(訳)山本光雄，政治学，岩波文庫，第９刷.

2）(編)廣松渉他(1998)：岩波　哲学・思想事典，岩波書店.

3）Jonas, H. Das Prinzip Verantwortung(1993)：Versuch einer Ethik für die technologisch Zivilisation, Suhrkamp Verlag,dritte Auflage.

4）ジョンソン，M.，菅野盾樹(1991)：(訳)中村雅之，心のなかの身体,想像力へのパラダイム転換,紀国屋書店.

5）片岡暁夫，平田竹男(1998)：共同体のスポーツ解釈の政治哲学的考察，体育・スポーツ哲学研究，20-1，pp.49-70.

6）片岡暁夫(1998)：東洋のシステム哲学と現代スポーツ・システム，体育・スポーツ哲学研究，20-1，pp.1-13.

7）加藤尚武：環境倫理学のすすめ，丸善ライブラリー，032，丸善株式会社，第10刷，1991

8）Kheel, M.(1996)：The Killing Game: An Ecofeminist Critique of Hunting, Journal of the Philosophy of Sport, vol.XXIII, pp.30-44.

9）Loland, S.(1996)：Outline of an Ecosophy of Sport, Journal of the Philosophy of Sport vol.XXIII, pp.70-90.

10）(編)文部省(1996)：第15期中央教育審議会第一次答申.

11）(編)新田義弘他(1994)：岩波講座　現代思想12，生命とシステムの思想，岩波書店.

12）Rollin, B.E.(1996)：Rodeo and Recollection-Applied Ethics and Western Philosophy, Journal of the Philosophy of Sport, vol. XXIII, pp.1-9.

13）(著)サイモン，R.L.，(訳)近藤良享(1994)：友添秀則他，スポーツ倫理学入門，不昧堂出版.

14）Wade, M.L., Sports and Speciesism(1996)：Journal of the Philosophy of Sport, vol.XXII I, pp.10-29.

15）湯浅泰雄(1991)：気とは何か，人体が発するエネルギー，NHKブックス613，日本放送協会.